令和６年２月１４日
上下水道局総務課

「令和６年能登半島地震」に伴う被災地での支援活動について（報告）

令和６年１月の能登半島地震に伴う被災地への支援として、断水が発生した地域での応急給水活動を行うため、下記のとおり上下水道局職員及び給水車を派遣しました。

■　派 遣 先　　石川県能登町

■　派遣期間　　１月６日（土）　～　２月２日（金）
※ 応急給水活動期間：１月８日（月）　～　１月３１日（水）

■　派遣体制　　職　員　：　６名１班（第１班～第３班）、４名１班（第４班～第７班）計３４名
車　両　：　給水車（３ｔ）１台、作業車１台
物　資　：　給水袋（６ℓ）１，２００枚

■　活動日程　（１）基本となる日程は以下のとおり。（第１班～第５班）
１日目　　：　宮崎港から神戸港へ向けて出発（宮崎カーフェリー）
２日目　　：　神戸港到着後、高速道路で金沢市へ移動
３～５日目　：　石川県能登町で応急給水活動を実施
６日目　　：　金沢市から高速道路で神戸港に移動し、宮崎港へ向けて出発（宮崎カーフェリー）
７日目　　：　宮崎港着

（２）１月２３日からの寒波による大雪の影響による対応は以下のとおり。
第６班⇒３～６日目：応急給水活動を実施（１日延長）
７日目　　：神戸港へ移動し、宮崎港へ向けて出発
８日目　　：宮崎港着
第７班⇒３～７日目：応急給水活動を実施（２日延長）
８日目　　：神戸港へ移動し、宮崎港へ向けて出発
９日目　　：宮崎港着

■　活動内容

時　間	内　容
４：00～５：00	金沢市内のホテルを出発。（約１３０ｋｍを約３時間かけて能登町に到着）
８：30	能登町役場で班長会議に出席。当日の給水場所の確認等を行う。
９：00～17：00	能登町の中心部にある能都体育館前にて長崎市と共同で応急給水活動を実施。（１月１１日までは崎山山村開発センター前）
16：00	能登町役場で班長会議に出席。当日の活動報告及び翌日の給水場所（案）の確認等を行う。
17：00	応急給水活動終了後、金沢市のホテルに向け出発。 ※２３日（火）と２４日（水）は大雪の影響により能登町に宿泊
20：00～22：00	金沢市のホテルに到着。翌日の準備等を行う。

応急給水活動では、被災者が持参されたポリタンクや応援事業体が用意した給水袋に給水車から直接給水しました。

その他に、給水場所が円滑に運営できるよう交通整理をしたり、給水が始まる前に除雪作業を行いました。

■　活動写真

能登町役場到着

隊長会議（能登町役場内）

給水活動

給水活動

給水活動

矢波浄水場での補水作業

給水場所の交通整理

給水場所の除雪作業

能登町の宿泊場所①

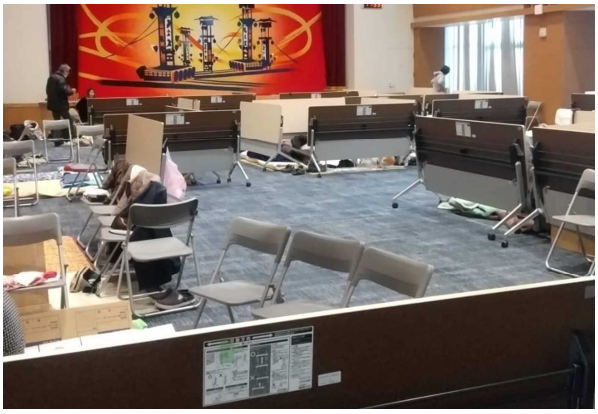
能登町の宿泊場所②
※1人1畳程度の広さ

■　参考写真

他事業体からの応援派遣

金沢市から能登町までの道中

被害状況（能登町）



一時避難場所（能登町役場）

■　応援派遣職員の所感

【被災地の状況】
・現地でＮＰＯの女性スタッフと話をした際、**女性が着替えるところの確保や知らない男性が近くにいると気になって寝れない**等の話があった。

・**災害物資は、食べ物より紙おむつや生理用品が先に無くなっていた**。（食料はある程度多めに来ていた）

【給水袋】
・宮崎市の給水袋は繰り返し使用可となっているが、水の入れ口を綺麗に折りたたむ事が必要である。綺麗に折りたたんでないと繰り返し使用が困難となる。水の入れ口が折りたたみ式のため、給水時間もかかる。住民の待ち時間短縮のため、長崎市が使用していたキャップ式が良いと思う。

【応急給水体制】
・様々な容器へ給水を行ったが、給水口が小さい容器（ペットボトル）への給水は非常に時間を要する為、給水口の大きい容器だと給水もスムーズに行えると感じた。

・高齢者で車を所有されていない方は、リュック等に容器を入れて運搬されており、１回の給水量も少量であるため、近隣の被災者間での協力体制等があるとスムースな給水ができると感じた。

・場所にもよると思うが、今回はドライブスルー方式の応急給水の方法をとっていたため、車を利用できる被災者には、女性・高齢者であっても負担が少なかったと思う。

・被災直後、貴重な水を多くの方に平等に給水するため、１人で給水可能な目安等を防災訓練などのあらゆる機会を通して、周知していくことが重要だと感じた。

・給水車から市民へ給水するのではなく、LC タンクを設置して、そこに給水車で給水して回る方法の方が、少ない給水車で多くの給水所をカバーできると感じた。

【応援体制】
・被災の度合いにもよるが、本市が同規模の被災を受け、同じような状況となった場合は、やはり他事業体からの応援が力になる。協定を結び、災害に備えることの重要性を再認識した。

・派遣先の応急給水については日水協関西支部が取り仕切っていた。被災自治体と応援派遣自治体の役割が明確にされていたため、お互いが任務を阻害することなくスムーズに進んでいると感じた。

・被災地は、ライフラインが被害を受けおり非常に不便で、体力維持も難しいことから、応援態勢に支障を来さないようにするため、応援者は、体力があり、健康かつ活力のある職員を優先すべき。

【施設整備】
・被災者の方に聞くと、水が一番必要と言われていた。水はトイレにも必須である。上水及び下水道事業の管の耐震化を迅速に進めていく必要があると感じた。

【その他】
・住民や復興の応援に来られる人たちに対してのコミュニケーションをとりつつ、次に復興に向けて工事等の方法を模索していくことが必要だと思う。
　ただ、まず天災があった時に対して自分自身が生き抜くための備蓄等をするべきだと感じた。

・応援に来られる事業体などの宿泊場所、トイレの問題が大きかった。特に今回は、寒さもあり雑魚寝というわけにもいかず、トイレがないところでの宿泊は困難であると感じた。平時より簡易トイレや生活用水などの備蓄も重要と感じた。